

第3章 琵琶湖環境の再生に向けて

琵琶湖は、豊かな生態系を支える源であり、人々はそのほとりに9千年以上前の縄文時代から生活を営んできました。現在では、近畿1,450万人の生存と経済的発展を支える重要な水資源となるなど、私たちに様々な恵みを与えています。

このすばらしい琵琶湖を健全な姿で次世代に引き継ぐため、今後も琵琶湖のもつ多面的な価値を守り育て、活用することを通じて健全な生態系と安全・安心な水環境の確保と人の暮らしと琵琶湖の関わりを再生を目指しています。

第3章

琵琶湖環境の再生に向けて

琵琶湖の価値

琵琶湖の豊かな自然環境としての価値、水源としての価値を守り育てることは、健全な生態系と安全・安心な水環境のため、とても重要です。

また、日々の暮らしの中で、私たちは琵琶湖の水産業の場としての価値、観光資源としての価値、学術研究の場としての価値に触れ、その恩恵を受けています。これらは人の暮らしと琵琶湖の関わりを再認識させてくれる大切な琵琶湖の価値です。

● 豊かな自然環境としての価値

〈環境政策課、琵琶湖環境科学研究センター〉

豊かな水量と広々とした空間をもち、様々な生物を育む琵琶湖が、長い歴史を持って自然界に存在することが大きな価値であり、県民の心のよりどころともなっています。

◆ 琵琶湖水系に生息する固有種

プランクトン (4種)

スズキケイソウ
スズキケイソウモドキ
ビワコスジタルケイソウ
ビワミジンコ

寄生動物 (1種)

ラフィダスカリス・ギギ

水草 (2種)

ネジレモ
サンネンモ

底生動物 (38種)

オオツカイメン
ビワオオズムシ
ビワカマカ
ナリタヨコエビ
ビワコエグリトビケラ
ナガタニシ
ビワコムズシタダミ
フトマキカワニナ
タテヒダカワニナ
ハベカワニナ
イボカワニナ
ヤマトカワニナ
カゴメカワニナ
シライシカワニナ
オウミガイ
ヒロクチヒラマキガイ
タテボシガイ
ササノハガイ
マルドブガイ
セタシジミ

マクロストームム
・カウムライ
イカリビル
アナンデルヨコエビ
ビワコシロカゲロウ
ホソマキカワニナ
クロカワニナ
ナンゴウカワニナ
モリカワニナ
ナカセコカワニナ
オオウラカワニナ
タテジワカワニナ
タケシマカワニナ
カドヒラマキガイ
イクチョウガイ
オトコタテボシガイ
メンカラスガイ
オグラヌマガイ
カウムラマメシジミ

魚類 (16種)

ビワマス
アブラヒガイ
ビワヒガイ
ホンモロコ
スゴモロコ
ヨドゼザラ
ワタカ
ゲンゴロウブナ
ニゴロブナ
ビワコオオナマス
イワトコナマス
イサザ
ビワヨシノボリ ※
ウツセミカジカ
オオガタスジシマ
ドジョウ
ビワコガタスジシマ
ドジョウ



スズキケイソウ

写真提供：
琵琶湖環境科学研究センター



ネジレモ

写真提供：
琵琶湖環境科学研究センター



アナンデルヨコエビ

写真提供：
琵琶湖環境科学研究センター



ニゴロブナ

写真提供：琵琶湖博物館

● 水源としての価値

〈琵琶湖政策課〉

琵琶湖は、滋賀県をはじめ京都府、大阪府、兵庫県の近畿約1,450万人の水道水源であり、その他農業用水・工業用水などにも利用されています。



府県名	琵琶湖からの給水人口 (H20)
滋賀県	1,148,702 人
京都府	1,811,645 人
大阪府	8,817,876 人
兵庫県	2,757,285 人
合計	14,535,508 人

※種の記載はまだ行われていないが、独立種として扱った
 出典：J.Nakajima(2012) Zootaxa 3586: 103-130
 H. Kawanabe, M. Nishino and M. Maehata(eds.)(2012) "Lake Biwa: Interactions between Nature and People". Springer

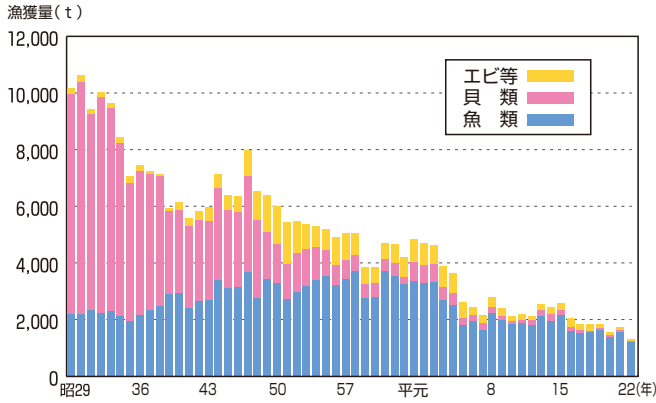
● 水産業の場としての価値

〈水産課〉

コアユ、ニゴロブナ、ホンモロコ、ビワマスなどの魚類をはじめ、セタシジミ、スジエビなど、平成23年（2011年）には 1,272tの水揚げがありました。

琵琶湖の魚介類は独特の漁法で獲られ、ふなずしなどのなれずしや湖魚の佃煮、あめのうお御飯などの伝統食として、滋賀県の産業や食文化を支えています。

◆ 類別漁獲量の推移



コアユ

ホンモロコ



セタシジミ

琵琶湖のエリ



ふなずし

湖魚の佃煮

● 観光資源としての価値

〈観光交流局〉

琵琶湖は20箇所を超える水泳場を有するとともに、湖上遊覧、マリンスポーツなどの場となっています。

また、周辺の美しい自然環境と相まって、滋賀県にとってかけがえのない観光資源であり、年間約4,736万人の観光客（平成23年）が訪れています。



● 学術研究の場としての価値

〈環境政策課〉

琵琶湖は生物・生態系、湖底遺跡などの学術研究の場となっており、県の試験研究機関だけでなく、大学なども研究機関を設置し、各種研究を行っています。

● ラムサール条約湿地としての価値

〈自然環境保全課〉

琵琶湖は、平成5年（1993年）に「ラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）」の登録湿地となりました。平成20年（2008年）には、県内最大の内湖であり、琵琶湖と長命寺川でつながっている西之湖が拡大登録されました。

沿岸市と県が琵琶湖ラムサール条約連絡協議会を設立し、環境保全活動の支援、普及活動を行っています。



トピックス
TOPICS

平成 25 年度の「びわ湖の日」は、“琵琶湖にもっと関わって” もらえるよう、「民間との協働」をテーマにびわ湖の恵みをPRしました。

〈環境政策課〉

県民の皆さんに琵琶湖をもっと身近に感じ、また関わってもらえるよう、本県と包括連携協定を結んでいる(株)セブン-イレブン・ジャパンおよびイオン(株)と協働で、「食」を通じた“びわ湖の恵み”をPRしました。また、成安造形大学と協働で、セブン-イレブン店舗掲示用の「びわ湖の日」コミュニケーションポスターを作成し、セブン-イレブン各店舗で琵琶湖のためにできることを宣言してもらいました。



セブン-イレブン店舗用のコミュニケーションポスター

制作者：成安造形大学
2年 荒井 菜那さん



県内のセブン-イレブン各店で「びわ湖の恵み！幕の内弁当」の販売。



イオン草津店の「びわ湖の恵みコーナー」

びわ湖の恵み
7月1日「びわ湖の日」
滋賀県

琵琶湖総合保全整備計画 (マザーレイク21計画)

〈琵琶湖政策課〉

琵琶湖総合保全整備計画（マザーレイク21計画）は、「2050年頃の琵琶湖のあるべき姿」を念頭に置き、健全な琵琶湖を次世代に引き継ぐための指針であり、平成22年度に第1期計画期間の終期を迎えたことから、平成23年10月に第2期計画に改定されました。

新しいマザーレイク21計画（第2期改定版）は、琵琶湖と人との共生に向け、「思いをつなぎ、命をつなぐ。母なる湖のもとに」のサブタイトルが示すとおり、さまざまな「つながり」がキーワードとなっています。



WEB <http://www.pref.shiga.lg.jp/biwako/ml21/ml21keikaku.html>

● 計画の目指すもの

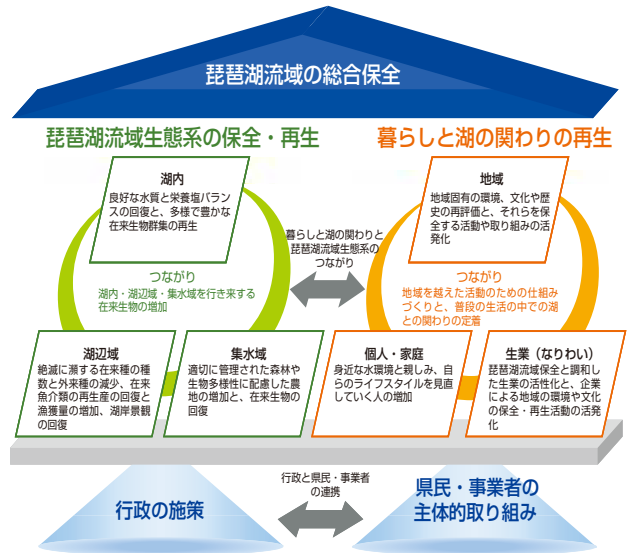
- ◆ 基本理念：琵琶湖と人との共生
- ◆ あるべき姿：活力ある営みのなかで、琵琶湖と人が共生する姿
- ◆ 基本方針：①共感 ②共存 ③共有
- ◆ 計画期間：平成11年度～平成32年度
第1期：平成11年度～平成22年度
第2期：平成23年度～平成32年度

● 第2期計画期間の2本の柱

第2期改定版では、新たな取り組みの方向性として「琵琶湖流域生態系の保全・再生」と「暮らしと湖の関わりの再生」を計画の柱に据えました。

「琵琶湖流域生態系の保全・再生」では、琵琶湖流域を「湖内」「湖辺域」「集水域」の3つの場に区分し、それらの「つながり」とともに目標と指標を設定して取り組みます。

「暮らしと湖の関わりの再生」では、「個人・家庭」「生業（なりわい）」「地域」の3つの段階に分け、それらの「つながり」とともに目標と指標を設定して取り組みます。

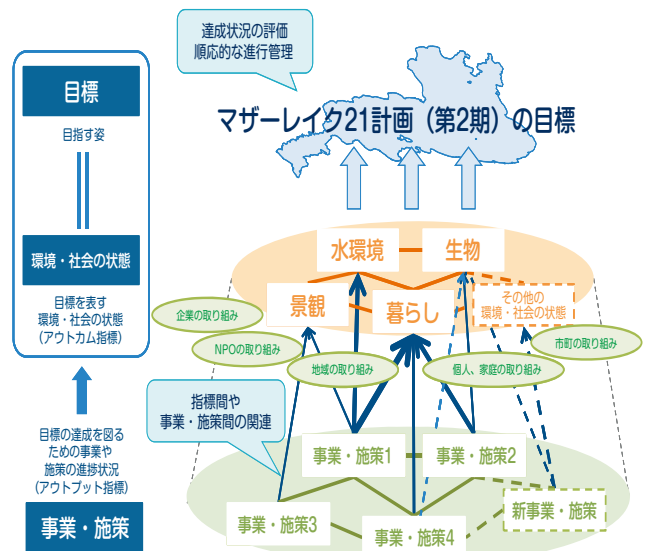


第2期計画期間における新たな取り組みの方向性

● 2種類の指標による複層的な評価

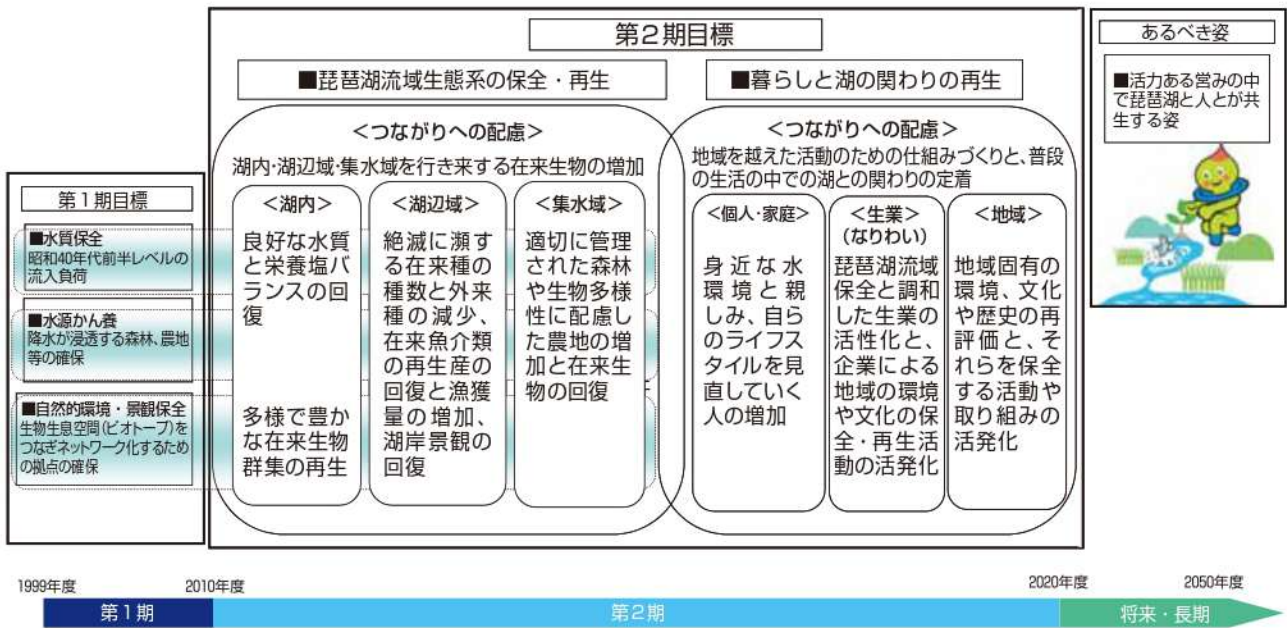
これまでの、個々の施策の進捗状況（アウトプット）により計画を評価していましたが、琵琶湖の総合的な保全という観点からは、施策を実施した結果現れる環境や社会の状態（アウトカム）がどの程度改善されたかを評価すべきと考えます。

このことから、環境や社会の状態を表す「アウトカム指標」と施策の進捗状況を表す「アウトプット指標」を設定し、これらを用いて、目標の達成の度合いを複層的に捉え、計画の進行管理を行うこととします。指標の数値がバランスよく改善され、想定外の障害の兆しが現れていないかをチェックすることは、琵琶湖流域生態系と私たちの暮らしの定期的な健康診断のようなものと言えるでしょう。

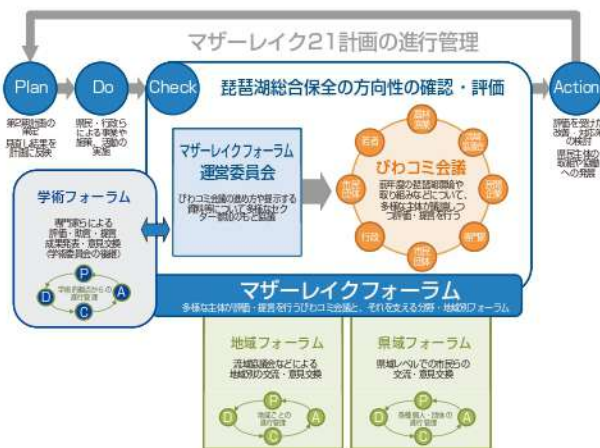


事業・施策と指標、目標との関係

● 段階的な計画目標



● マザーレイク21計画の進行管理



計画の進行管理では、状況に応じ、施策の内容だけでなく、目標や指標も修正を加える「順応的管理」の手法を取り入れています。計画の評価段階では、目標の達成状況について、指標と施策（事業）の進捗状況から、複層的な評価を行います。その際の多様な主体の参画の場となるのが「マザーレイクフォーラム」です。

● マザーレイクフォーラム



第2回マザーレイクフォーラムびわこ会議（平成24年9月16日）での議論の様子

マザーレイクフォーラムは、県民、NPO、行政等、琵琶湖流域に関わる多様な主体がお互いの立場や経験、意見の違いを尊重しながら、「思い」と「課題」によってゆるやかにつながり、琵琶湖の将来のためにみんなで話し合うとともに、マザーレイク21計画の進行管理の一部を担う「場」です。平成24年3月25日にはマザーレイクフォーラムを立ち上げ、設立シンポジウム、円卓会議を開催しました。今後は、びわこ会議（第2回目以降から円卓会議を「びわこ会議」に改称）の開催と、インターネットを通じて情報交換を行うみんなの情報交流サイト「マザーレイクフォーラム」の運営により、琵琶湖の保全に向けての行動や新たな活動への展開に繋がっていきます。

● 重点プロジェクト

マザーレイク21計画では、目標の達成に大きく貢献することが期待でき、関連機関が連携することでさらに効果を高めることができる事業・施策を「重点プロジェクト」と位置づけ、集中して取り組んでいます。

- 1 「近い水」のある暮らし再生プロジェクト
- 2 琵琶湖の生きものにぎわい再生プロジェクト
 - (1) 南湖再生プロジェクト
 - (2) 内湖再生プロジェクト
 - (3) 外来生物等対策プロジェクト
- 3 森・川・里・湖のつながり再生プロジェクト
- 4 水環境の保全プロジェクト
（横断的なプロジェクト）
魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト